



Data

監督・脚本: 河合健

出演: 吹越満 / 大方斐紗子 / 北香那
 / 西めぐみ / 西山真来 / 高橋睦子 / 藤森三千雄 / きみふい / 細川佳央 / 河合透真

👁️👁️ みどころ

私たち団塊世代では、“なんのちゃん”と言えば南野陽子のことだが、本作のそれは、BC級戦犯の遺族として闘い続けている“南野軍団”の孫娘。10歳の彼女は、怪文書の送付活動続ける祖母らと共に、“まやかし”の平和記念館設立を進める“市長派”と対峙していたが・・・。

平成最後の年、少子高齢化が進む関谷市は、外来種となる亀の大量繁殖に悩んでいたが、子供達にもなぜか大きな“分断”が！この混乱は一体なぜ？

1989年生まれの河合健監督にとって、太平洋戦争とはナニ？BC級戦犯とはナニ？そんな疑問が本作のタイトルに凝縮！本作の大テーマは“混沌”だが、そのハチャメチャぶりは・・・？

* — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□へんてこなタイトルの、何とも奇妙な戦争映画が次々と■□■

2021年8月15日の終戦記念日に向けて、今年のシネ・ヌーヴォは「太平洋戦争から80年 戦争映画特集」を7月30日から9月2日まで開催し、『激動の昭和史 沖縄決戦』（71年）や『東京裁判』（83年）等のオーソドックスな戦争映画の名作を特集するが、その前の7月には、『なんのちゃんの第二次世界大戦』というへんてこなタイトルの戦争映画が公開された。今年の3月には『きまじめ楽隊のぼんやり戦争』（20年）（『シネマ48』270頁）という、これまたへんてこなタイトルの奇妙な戦争映画が公開されたが、2021年3月23日付日経新聞は、「架空の戦時体制に映る現代日本」、「ぼんやりした総動員描く」と題して、①『きまじめ楽隊のぼんやり戦争』、②『なんのちゃんの第二次世界大戦』、そして、今冬公開予定の③『鈴木さん』の3本を特集し、編集委員の古賀重樹氏が解説しているので、これは必読！

『きまじめ楽隊のぼんやり戦争』について、私は「残念ながら脚本はイマイチ！しかし、

問題提起の視点は良し！練度を向上した次作に期待したい」と書いたが、さて本作は？

■□■ 関谷市では、平和記念館設立派と戦犯遺族が激突！ ■□■

本作の時代は、平成最後の年。舞台は、少子高齢化が進み、外来種である亀の大量繁殖問題に悩まされている架空のまち、関谷市だ。そして、終戦75年の平和記念館設立を目指す清水昭雄市長（吹越満）と、「平和記念館設立を中止せよ。私は清水正一を許さない」という怪文書を送りつけた、南野和子（大方斐紗子）との“激突”が本作のメインストーリーだ。

車椅子で登場する、昭雄の祖父である正一（藤森三千雄）は今105歳だが、戦争中も教師だった彼が反戦を訴え続けてきたというのが市長の自慢だ。ところが、BC級戦犯の遺族で、石材店を営んでいる和子らは、それを真向から否定。正一がホントに反戦論者なら、戦争で死亡した自分の息子に「國勝（くにかつ）」などという名前をつけるはずがない、というのが和子らの主張だが、さて、真相は？

■□■ 河合監督の問題意識は？本作の狙いは？ ■□■

私たち団塊世代は、子供の頃に公開されたフランキー堺主演の『私は貝になりたい』（59年）（『シネマ43』340頁）を知っているから、BC級戦犯のこともよく知っている。また、毎年8月15日の終戦記念日に向けて戦争映画の名作が次々に公開されたから、“あの戦争”のこともそれぞれに知っている。しかし、戦後74年も経った今、「日本はアメリカと戦争したの？ウソー？」という若い子がいるそうだから、「BC級戦犯って一体何？」という質問が出て仕方がない。1989年生まれ河合健監督は、そんな問題意識の下で本作を作ったそうだ。

本作のパンフレットには次のとおり書かれている。すなわち、

<p>僕が戦争に対して切実に感じること。 それは戦争の悲惨さよりも前に、語り手によって事態が簡単に崩れ落ちてしまう恐ろしさだ。 何があったのか、誰が悪いのか。 人に聞けば聞くほど、もうわけが分からなくなってくる。 この混乱、何かと似ているなと思ったら、今の政治に対しても同じだった。 その感覚をそのまま映画で表現しようと思った。 平成生まれの僕と太平洋戦争との不透明な距離感。 どうか、実感してほしい。</p>

河合健

私は本作鑑賞後に、1989年生まれ河合健監督の舞台挨拶を聞いたが、そこで彼の口から語られたのは、上記と全く同じ内容だった。

そんな問題意識から作られた本作のテーマは“混沌”だが、さて、その展開は如何に？

■□■ “なんのちゃん” こと南野マリ登場！ ■□■

本作は、清水市長派 vs 南野家の対立を描くストーリーだが、登場人物も多いから、その点はきちんと整理しておく必要がある。まず、清水昭雄市長を支えるのは、①秘書の美香（きみふい）、②スチールカメラマンの麻呂（細川佳央）、③平和推進委員会の書記係のタツオ（河合透真）の3人。次に、妻の圭子（河合佳子）、娘の瑞稀（藤原佳奈）たちだ。さらに、その背後には、平和推進委員会を応援する多くの市民がいるらしい。

それに対して、平和記念館設立反対闘争を続けている南野石材店の店主は“和子ばあさん”だが、地元のスナック「なんのちゃん」のママをしている娘の南野えり子（高橋睦子）や、えり子の長女の紗江（西山真来）らも、“南野軍団”の強力な構成員。そして、後半から本作の主人公として登場してくる南野マリ（西めぐみ）は、紗江の娘だ。スナック“なんのちゃん”には、清水市長だけでなく平和記念館設立推進派の面々も客として訪れ、懸命にえり子を説得しているが、えり子の反対の意志は強いらしい。また、スーダンで国際ボランティア活動をしている紗江は、「関谷市の平和記念館設立という“狭い視点”ではなく、広く世界平和に目を向けよう」と主張し、平和推進委員会に単身で乗り込んでくるから、そのパワーはすごい。

さらに、10歳のマリは、男勝りな気性でメチャ元気。本作中盤、大量繁殖している外来種の亀の取り扱いを巡って、2人の男の子と、女の子ながら1人で対決する姿は感動的と言ってもいいほどだ。そんな“なんのちゃん”こと南野マリは、本作後半からどんな活躍を？私たち団塊世代では、“なんのちゃん”といえば南野陽子のことを指していたが、本作の“なんのちゃん”は、和子ばあさんのひ孫にあたる、この南野マリのこと。しかし、『なんのちゃんの第二次世界大戦』って一体何？これはサッパリわけがわからない！まさに、本作は混沌・・・。

■□クライマックスに向けた大混乱と“混沌”ぶりに注目！■□

平成生まれの河合監督にとっては、若い人たちがBC級戦犯を知らないのは当然のこと。そのため、河合監督はあえて本作の一方のメインキャラクターに、“BC級戦犯の遺族”である和子ばあさんを設定したわけだ。それに対して、今なお車椅子で生きている105歳の正一を「反戦を訴えたまちの偉人」に祭り上げながら平和記念館の設立に邁進している清水市長は、一見常識的で正統派に見えるが、その実態は？来たるべき市長選挙にも盤石の態勢を整えている清水市長は自信満々だが、娘の瑞稀が韓国旅行に行つて勝手に整形手術を受けたり、家族間でワケの分からない貴族言葉を使う等、家族の結束のインチキ性も浮かび上がってくる。もちろん、市長宛てに怪文書を送り付けるという南野軍団の“暴挙”は許されるべきではないが、そうかといって、清水市長のウソっぽい平和記念館設立運動も、まさに今の日本の薄っぺらで実体のない民主主義を象徴していると言わざるを得ない。しかして、この両者の言い分は、どちらが正しいの？もちろん、その正解はないし、河合監督も本作でそれを示すつもりはないから、本作をいかに作るかは、ある意味で自由で気楽なもの・・・？

河合監督は脚本上のテクニックとして(?)、早々に和子ばあさんをスクリーン上から退場させようえ、後半からはオーディションで発見したという天才少女、西めぐみを主演に仕立てて、その大混乱と“混沌”ぶりを見せていくので、それに注目！7月26日には宮沢りえ主演の『ぼくらの七日間戦争』(88年)がテレビ放映されるが、本作後半からクライマックスにかけては、正一の誕生日会と、オープンにこぎつけた平和記念館のセレモニーを巡ってハチャメチャな大混乱が勃発！そこでは、マリ率いる子供軍団も、「スパルタクスの反乱」ならぬ、亀を使った大反乱を見せるので、それにも注目！

■□■同年生まれの監督、日中比較！やっぱり中国の方が上！■□■

1989年は、日本はバブルが崩壊した年であると共に、昭和の時代から「失われた10年」を含む低成長の平成の時代に入った、分かれ目の時代。それに対して、6月4日に天安門事件が起きた中国にとって1989年は、大激動の年だが、以降、鄧小平の改革開放政策に導かれて中国流の社会主義的資本主義が急成長していくことになる。そんな、1989年生まれの河合監督と同世代の中国人監督が、『凱里ブルース(路辺野餐)』(15年) (『シネマ46』190頁) や『ロングデイズ・ジャーニー この夜の涯へ(地球最後の夜晚)』(18年) (『シネマ46』194頁) の毕贛(ビー・ガン) 監督、そして『象は静かに座っている(大象席地而坐)』(18年) (『シネマ46』201頁) の胡波(フー・ポー) 監督だ。

私が本作を観た7月22日は、河合監督が舞台あいさつのため来阪し、上映後10分ほど彼の話聞くことができたが、その内容はパンフレットに書いてあるものと全く同じで、観客に向けた直接のアピール力は乏しかった。本作での彼の狙いは、脚本の決定稿から「教えてなんのちゃん」などを含む、分厚いパンフレットの中にすべて込められているが、そのエッセンスは前述のとおり。そして、たしかに本作にはその狙い通りの“混沌”ぶりがタップリと詰め込まれている。しかし、中国の同世代監督である毕贛監督や胡波監督作品の物凄いアピール力に比較すると・・・？その出来の差は明らかだ。そう私は思うのだが・・・。

2021(令和3)年7月28日記